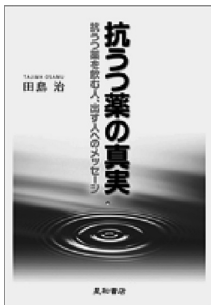


## ■ 書 評



抗うつ薬の真実  
—抗うつ薬を飲む人、  
出す人へのメッセージ—

田島 治 著  
星和書店 2011年4月  
320頁、定価 2,940円

約10年前にわが国に初めてSSRIが導入され、以降うつ病の薬物療法は従来の三環系からSSRIあるいはSNRIと呼ばれる新規の抗うつ薬が主役となった。うつ病の増加と並行して抗うつ薬の処方数は増加し、それに伴って抗うつ薬療法のよい面ばかりでなく、不都合な面も明らかになりつつある。導入当初に喧伝されていた副作用が少ないという点については、多い少ないといった量的な問題ではなく、内容が質的に異なっているという方が適切である。さらに抗うつ薬による自殺関連行動や衝動性の亢進などは、マスメディアでも広く報道され、一流欧米誌には軽症うつ病における抗うつ薬の効果を疑問視する論文も発表された。このような状況のもと、抗うつ薬の役割について、われわれ精神科医は一度冷静に判断すべき時が来ているように思われる。

本書は、抗うつ薬の臨床試験に詳しいだけでなく、その薬理作用や実際の使用法についても広汎な知識を持ちながら、製薬企業の影響を受けず、独自の活動をされている著者の最近の論文をまとめたものである。初出は精神科専門誌であったり、一般医向けの雑誌であったりするためか、記述の深さはしばしば異なり、内容が重複する部分もある。しかし、精神科薬物療法の歴史から、現在の薬物療法の問題点を指摘するという著者独自の視点は、精神科医にとっても興味深いところであろう。

著者は、精神科薬物療法における製薬企業の影響を強く批判するD. Healyの影響を強く受けたと述べているが、Healyの著書にあるような攻撃的な記述

はなく、批判的な論文を紹介しながらもバランスのよい内容となっている。抗うつ薬による攻撃性や自殺関連行動の増加の議論などは、このような冷静な立場でなければ、精神科医の反発を招くだけであろう。本書ではこの問題に限らず、最近話題の双極スペクトラム概念と抗うつ薬使用についても冷静に論じている。

著者独自の見解は、SSRIの作用機序についてのものであろう。SSRIはうつ病だけでなく、いくつかの不安障害にも有効であることが示されている。SSRIは抗うつ薬なのかそれとも抗不安薬なのであろうか。著者は、SSRIはうつ病や不安障害そのものに働くというよりも、セロトニンを介して陰性の感情認知を抑制し、ゆったりとした感じやこだわりの低下を生じさせて、「まあいいか」と思う「感情麻酔作用」を持っているのが特徴であると述べている。そのユーモラスな表現とともに、多くの臨床家になるほどと思わせるところがあるのではないだろうか。さらに著者は、もしそうであるならば従来の三環系抗うつ薬の時代とは違った視点で抗うつ薬を使わなければならないと主張する。ここで注目されるのが、著者を含めていくつかの研究者によって主張されているレジリエンス概念である。著者は、抗うつ薬は異常な脳の状態を正常化するという疾患中心モデルを捨て、薬物はむしろ異常な脳の状態を生じさせるという薬物中心モデルを採用する。患者には回復に向かう生物学的なレジリエンスの基盤があり、抗うつ薬の役目は患者を回復軌道に乗せるためのトリガーにあると主張する。たしかに、うつ病が多様化し、あらたなうつ病の治療と回復が求められている現在、このような視点は重要である。

精神科医にとっては文献の引用が少ないのは残念であるが、巻末にはいいねいな索引が作られており、特定の話題を糸口として本文をすぐに参照することができるようになっている。最近の抗うつ薬やうつ病ブームに対して、多少とも疑問を持つ精神科医には強く推薦したい。

(仙波純一)